

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04188

研究課題名（和文）世代間アンビバレンス視角による成人親子関係の親密性の把握

研究課題名（英文）Measuring Intimacy of Intergenerational Relationship by  
Intergenerational-Ambivalence Approach

研究代表者

田中 慶子（TANAKA, Keiko）

慶應義塾大学・経済学部（三田）・特任准教授

研究者番号：50470109

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：成人親子関係における親密性を把握することを目的とし、世代間アンビバレンスの視角をもとに、個人レベル、父・母とのダイアドレベル、集団（家族や家庭全体）レベルを区別し、関係の質について、満足度や良好度といったポジティブな方向だけでなく、冷たい態度やストレーンなどのネガティブな方向からも測定することを試みた。多面的、そして通時的な評価を測定することによって、親子関係の累積的な効果の一面と、アンビバレントな構造が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで所与とされてきた、あるいは同居や援助など形態や行為によってのみ把握されていた成人親子関係の親密性を、個人、ダイアド、集団という複数のレベルにおいて、ポジティブ・ネガティブな方向の両面からの測定を通じて、小規模ではあるが有効な項目を整理し、ネガティブな方向からの測定の意義を確認した。成人親子関係の親密性は、その全体像がつかめておらず、親密化の方向性も多様であることが指摘されており、アンビバレントな親子関係の実態を詳細に、そしてその推移を把握する方法論を提案することができた。

研究成果の概要（英文）：Based on the perspective of intergenerational ambivalence, we distinguish individual level, dyad level with father/mother, and group (home or whole family) level to grasp the intimacy in adult-parent-child relationship. We attempted to measure quality not only in the positive direction such as satisfaction and goodness, but also in the negative direction such as cold attitude and family-strain. By measuring multifaceted and diachronic evaluations, one aspect of the cumulative effects of parent-child relationships and ambivalent structures were clarified.

研究分野：家族社会学

キーワード：世代間アンビバレンス 親密性 成人親子関係

## 1. 研究開始当初の背景

(1)少子高齢化や未婚化・晩婚化の進展、離婚の増加などに伴い、近代家族といわれる核家族や、標準的なライフサイクルを想定することは困難になっている。1990年代以降の社会構造の変動により、ひとり親や貧困などの経済的な困難、それに伴う家族内の人間関係の緊張・不和を経験した人が増加したことが予想される。その一方で、近代家族における愛情規範や「子どものため」規範が普及し、夫婦・親子間において親密性の高まりや情緒関係の強化が進み、人びとの「家族」の経験は多様化している。同時に資源としての定位家族は、経済的な側面のみならず、情緒的結合や親密性の基盤という関係性の面での格差化や二極化も進んでいると思われる。家族内・世代間での私的扶養やケア機能の社会的期待を背景に、世代間関係におけるケア機能はより重要性を増しており、扶養やケアの基盤となるであろう世代間の情緒関係や親密性のあり方が注目されている。

これまで日本の家族研究において、情緒関係や親密性に関する研究は、関係の「質」に関する研究と位置づけられ、個々の領域や対象に対する「満足度」を問い、社会経済的属性との関連や、居住形態、扶養など役割の遂行状況との関連を分析することが中心であった。しかし、そもそも世代間における関係の「質」とは何か、その定義自体が曖昧であるし、関係の「質」の測定方法およびその妥当性についても議論の余地が多い。また、多くは調査時点の状態のみを質問対象としており、それまでの関係の累積については、ほぼ考慮されておらず、ライフコース的な視点が欠如している。

(2)関係の「質」も含めた世代間関係についての計量的アプローチとして、国際的には Bengtson による世代間連帯理論が知られている。近年では、世代間連帯理論を継承、発展させた「世代間アンビバレンス」の視角が提唱されている(代表的なものとして Luscher, K. & Pillemer, 1998)。老年学や社会学などにおいて、このアプローチに依拠した多くの研究が行われている。一元的、あるいは(ポジティブな面から)一方向的に世代間関係を捉えるのではなく、個人と個人、ダイアド間での結びつきを多面的に捉え、それらを同時的に考慮すること、そして葛藤や緊張状態も積極的に捉えていくという点で、新たな視角として有効である。

家族・世代間関係を対象とした日本の代表的な調査でも、親子関係の満足度や、関係良好度、トラブルの有無といった質問がある。しかし、現在用いることのできる家族調査のデータでは一次元、単一項目による捕捉であり、回答も良好や満足など順調な関係に評価が偏っている。またポジティブな側面からの捕捉であるため、世代間アンビバレンスの視角によって提起された多次元での把握、個人の葛藤や交渉といった観点から分析することが困難である。関係の「質」を総体として捉えるアプローチが必要である。

その際に、世代間の関係性の基礎となる、幼少期から現在に至るまでの親子・家族関係の経験をふまえた、現状の把握という視点も必要である。親の離婚・再婚や経済的困難の経験、親やきょうだい間での家族関係の不和や緊張、成員の障害や疾病等によるヤングケアラー役割など、定位家族での困難な経験の実態は十分に把握されていない。これらの経験が、その後の家族行動や世代間関係にどのような影響を及ぼすのか。以上のように、長期にわたる親子関係を通りライフコース的な視点から、関係の「質」を多面的に把握する方法論の検討が求められる。欧米とは異なる日本の親子・家族関係の文脈に即した世代間アンビバレンスの視角の応用によって、これまで看過されてきた定位家族における緊張や葛藤をも取り込んだ関係の「質」の把握が目指される。

## 2. 研究の目的

世代間関係における親密性の計量的把握を目指し、世代間アンビバレンスの視角から、世代間関係の「質」に関する理論的・方法論的な検討を行う。世代間アンビバレンス研究についてのレビューを行い、定位家族での困難な経験や定位家族との関係、現在の世代間関係の親密性を把握する質問項目を作成し、成人子を対象とした実査を行い、関係の「質」についての方法論を整理し、現在の扶養やケアの基盤としての世代間の親密性を把握する方法論的な視角の提示を目的とする。

## 3. 研究の方法

先行研究のサーベイを行い、成人子親子関係の関係性の測定に関して採用されている項目や、その指標の収集・整理をおこなった。そのうえで、中期親子関係を中心的な対象として想定し、親子関係だけでなく、夫婦関係やきょうだいの関係、地域や職場などとの人間関係も含め、サポートや関係の評定に関する質問を含む、パイロット調査を実施した。

調査は、調査会社のモニターを用いて性別と年齢層による割り当てでサンプリングを行い、郵送による質問紙調査をおこなった。対象は、30～70歳までの男女で500名に依頼・配布し、374名の回答があった。

## 4. 研究成果

(1)日本における中期親子関係研究の「質」の測定に関して、成人の親子関係を対象とした研究は、心理学領域における大学生を対象とした、親との関係についての研究が多く、複数の項目から構成される尺度が用いられている(たとえば水本 2018 など)。親子の愛情(愛着)や信頼などと、自立の達成、あるいは友人・恋人関係や大学生活での適応との関連を議論されている。しか

し多項目が必要で、アンビバレンス視角が想定するような行為レベルの項目などを含まないため、情緒面だけの簡略な指標を設定することが必要である。また、社会人や有配偶者を対象とした同様の調査は多くなく、加齢やライフステージの移行に伴う変化が捉えられておらず、中期親子関係の全体像が十分に明らかになっていない。

(2) 社会学領域における量的調査では、日本家族社会学会の「全国家族調査」において、ダイアド別の援助や会話、関係良好度が尋ねられている。ただし関係良好度は、一項目で簡便な質の測定項目であるが、回答が「良好」に偏ってしまい、測定内容について検証が必要である。また、統計数理研究所の「日本人の国民性調査」や、JGSS などの大規模調査においては、「家族全体」や「家庭生活」全体についての満足度が測定されている。満足度を用いる場合、回答が特定の位置（「やや満足」のような上から 2 番目の位置）に回答が集中する傾向があること、そして漠然とした「家族」や「家庭」が、回答者によってとらえ方が異なると思われ、複数のダイアドを持つ人の場合、その解釈が困難であるといった課題がある。

(3) 本研究では、親子関係を中心とし質の測定について、個人、ダイアド、集団という 3 つのレベルを区別し、ポジティブ・ネガティブの両側面から測定することを念頭におき質問紙を作成した。具体的には、家族ストレス、孤独感、関係良好度、家族関係全体の満足度である。また、15 歳時点を回顧し、その時点の親の態度（具体的には、かわいがってくれた、冷たく接することがあった、好きだったの 3 項目）の評定や、家庭の雰囲気、支援の内容を尋ねた。そして、長期的推移を測定するために、試験的な試みとして、15 歳から現在までの通時的な状況を回答してもらうようにした（回答方法および記入の具体例は、図 1 参照）。

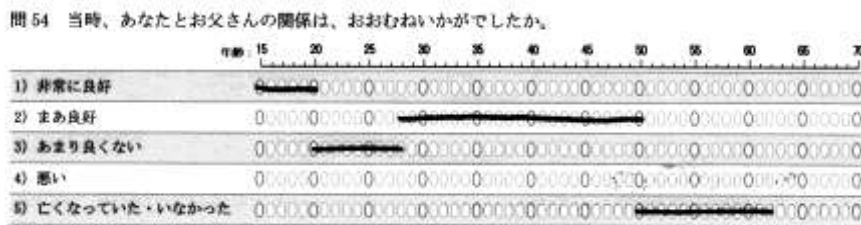


図 1 父親との関係良好度の通時的状況の記入例

1 人以上の親が存命の 262 人（男性 56.3%、女性 43.7%）を対象に、各項目について検証をおこなった。なお対象者の平均年齢は 47.3 歳、有配偶率 75.5%、親との同居率はおよそ 2 割である。

各指標の相関係数を確認すると、多くの項目で統計的に有意な関連があり、ストレス 3 項目、孤独感、生活、近隣、余暇、家計の状態、友人関係、仕事、家族関係全体についての各満足度、父・母との関係良好度、15 歳時の父・母との関係、家庭の雰囲気については係数も  $r = \pm .4$  以上の相関を示すものが多かった。ただし、子どもとの関係良好度、ストレスや満足度と 15 歳時点の評定については、有意ではあるが係数が小さい、もしくは一部は有意ではなく、線形の関係は見いだせない。また、父親と母親との各項目の評定の相関係数は、関係良好度  $r = .624$ 、15 歳時点で「かわいがられた」 $r = .564$ 、「冷たい」 $r = .458$ 、「好きだった」 $r = .538$  と、有意な相関があるものの、父と母で評価が一致しない人が一定数いることが確認できる。ネガティブな方向から尋ねた「冷たい」で係数が小さい。従来の調査が注目していたポジティブな方向からだけでなく、ネガティブな方向の両面から多面的に尋ねることで親子関係のアンビバレントな側面を確認することができた。また、「15 歳時点の家庭の雰囲気」と、現在の良好度の相関は、父親  $r = .491$ 、母親  $r = .345$  であり、青年期の家庭の評価と、父・母との個別の関係は別に評価されていること（家庭全般の評価は、父親との関係に影響を受けている可能性）が推測される。

図 2 には、親子関係を中心とする主要な項目について、男女別に平均値を求めた結果を示している。男女で差があったのは、母親との関係良好度と、15 歳時点で父親が「自分のことをかわいがってくれた」という 2 項目のみであった。母親との関係良好度は女性の方が高く母娘関係の親密さはこれまでの調査結果とも一致する。15 歳時点で父親の態度については、男性の方が父親にかわいがられていない（選択肢は、「強く感じた」～「ほとんど感じなかった」の 4 択で、得点が低いほど、「かわいがってくれた」と感じなかった、という解釈）と評価している。既存の調査でも父-息子関係は、その他の関係に比べ関係が悪いことが知られているが、現在の良好度や、「15 歳時点で親をととても好きだった」という質問では性差はないものの、「かわいがられた」という親の態度を尋ねた場合に、差がみられることは興味深い。親の養育態度、とりわけ父親像は、世代によって異なる経験となっていることや、受験や反抗期などのタイミングと重なるときに、同性同士の父-息子関係においてコンフリクトが多く発生していることなどが要因となっていると思われる。

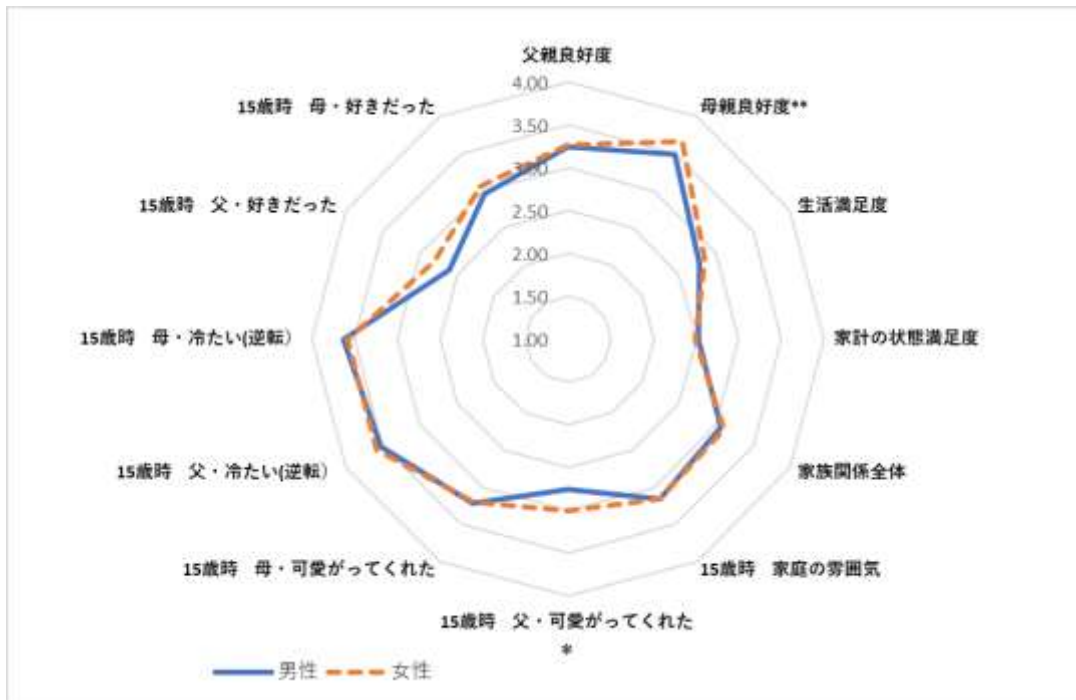


図2 性別 関係の「質」の各項目についての評価 (1~4点、得点の高い方が良い状態)

通時的な回答については、記入の判定 (選択肢が変わる年齢で回答が重なる、逆に空白になっているなど) が難しいことや、ライフイベントをすべて尋ねているわけではないので、当該年齢で発生したイベントを捕捉できないため、データの質とその分析には課題が多く残る。おおむねの傾向として、多くの人が毎年、上下にジグザグと変動するのではなく、初期の状態が数年以上維持されており (記入が平行線になっている)、結婚や子どもの誕生というタイミングで、1段階の上下変動があるというパターンが多い。また父親と母親と比べると父親の方が相対的に低めの評価となる期間が発生しており、NFRJ で確認している現在、一時点の調査でもみられる、良好度に見る評価の性差は、ライフコースを通じて累積してきた結果である側面を (回顧であるが) データから確認することができた。

以上のように、親子関係の質や情緒的な親密性をとらえる指標は、複数のレベルで相関があるものの必ずしも一致しないことから、単位や対象を明確にして多面的に測定することが有効であること、そして一項目であっても、ポジティブな方向だけでなくネガティブな方向から測定し、それらを比較することで、親子関係のアンビバレントな側面を捉えることができる。世代間アンビバレンスの視角を適用することの意義を確認できたが、今後はさらに項目の取舍選択や通時的な推移の尋ね方・データ化の工夫をおこない、大規模なサンプルを対象とした検証を行う必要がある。

#### <引用文献>

- Luscher, K., & Pillemer, K., Intergenerational ambivalence. *Journal of Marriage and the Family*, 60(2), 1998, 413-425
- 水本 深喜、青年期後期の子の親との関係:一精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差一、*教育心理学研究* 66(2)、2018、111 - 126

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田中慶子・坂口尚文	4. 巻 59
2. 論文標題 共働き夫婦の家計運営	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本労働研究雑誌	6. 最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中慶子	4. 巻 45
2. 論文標題 1990年代以降の中期親子関係研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族研究年報	6. 最初と最後の頁 27-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本家政学会編（田中慶子）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 現代家族を読み解く 1 2 章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----